

入院も悪くない

大平 忠

九月に四泊五日で病院に入院した。目の手術のためである。「黄斑上膜」なる病名で、網膜の焦点に膜ができ、その膜にシワが寄ったのだ。シワがよれば、映像がボケたり歪んだりする。原因は、要するに加齢だそつだ。

病院は、博多駅の近くにあるH病院で、五階建ての大きな病院である。いつも待合室は患者で一杯だ。常勤の医者が十六人いる。検査機器もずらりと並び、受けた検査も七、八種類ぐらいあった。

医者、看護師の説明はすこぶる丁寧で、分からないことはないかと向こうから確認してくる。インフォームドコンセントというのであろうか。完璧である。手術するかどうか決めるときは、担当医師の他に副院長が診察してWチェックした。手術の結果についてもやはりもう一人の医者が確認した。さらに、院長から日曜日に診察を受けた。看護師に聞くと院長先生は月月火水木金土と言うのには驚いた。

病室は、コロナというので奮発して個室に入った。テレビは片目で見える。見辛いのであまり見なかった。本の代用としてKINDLEを持っていった。活字が大きくなるので片目でも読める。これには大いに助かった。看護師が、これで読んでも患者さんを見るのは初めてだとか。

看護師さんは入れ替わり立ち替わりたくさん部屋に来る。しかし、全員マスクをしているので顔が分からず残念だった。しかも、マスクをしているとみんな美人に見える。夜目、遠目、傘の内というが、マスク顔も加えないといけない。

食事は、さすが眼科である。魚の身からは骨を全部取ってあった。食後は懇談室に行くと美味しいコーヒーが百円で飲めた。

退院の日になると、名残りが惜しくなった。家で留守番の家内も、恐らく同じ思いだったに違いない。